

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320120

研究課題名（和文）近世前期西南諸藩史料の統合的研究—大規模軍役動員時の幕藩・藩藩関係から—

研究課題名（英文） Integrative research of the historical records of several southwest hans in the beginning of the Tokugawa shogunate : focusing on the relations of the Bakufu and the han or the mutual relations between the hans at the time of large-scale mobilizations of military obligations.

研究代表者

小宮 木代良 (KOMIYA KIYORA)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：90186809

研究成果の概要（和文）：

本研究は、西南地方（中国・四国・九州）諸藩に伝来した大量の史料を蒐集し、とりわけ近世前期に、幕府がそれら諸藩に賦課した大規模軍役動員に注目しながら、そこに表れる幕府と藩、藩と藩相互の政治的関係を考察した。具体的には、元和九年の松平忠直事件、天草島原一揆、大坂城助役普請等を中心とした研究を行い、報告書『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一二一六 十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員』にまとめた。

研究成果の概要（英文）：

For this research, we collected many historical records preserved in the southwest (Chugoku-Shikoku and Kyushu) hans, focusing the large-scale mobilizations of military obligations imposed by the Bakufu on these hans in the beginning of the Tokugawa shogunate. From these sources we analyzed the political relations between the Bakufu and the han or mutual relations between the hans .

We mainly focused on the Tadanao Matsudaira incident, the Shimabara Rebellion and the service for the official construction of Osaka Castle. As a result, we were able to compile the report "*Large-scale military mobilization on southwest hans in the first half of the 17th century* [the Historiographical Institute, the University of Tokyo result-of-research report 2012-no.6]."

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2012年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・近世前期・西南諸藩・大規模軍事動員

1. 研究開始当初の背景

近世前期における幕藩・あるいは藩と藩の政治関係を分析する場合において、既知の幕府関係一次史料に比して、未紹介あるいは、研究利用があまりなされていない諸藩関係の一次史料が大量に存在することについては、早くからその重要性が認識され、個別の藩を中心としつつ、いくつかの成果も示されていたが、近年は、全国において、少しずつその整理・調査・紹介が加速的に進みつつあった。当該期の研究を専門とする当研究グループのメンバーにおいては、こうした成果をあらためて確認するとともに、それ以外の藩史料も含め、テーマを絞りつつ、正確な内容読解を踏まえた分析・整理が必要であるとの認識が共有されていた。

2. 研究の目的

本研究は、西南地方(中国・四国・九州)諸藩に伝来した大量の史料を蒐集し、とりわけ近世前期に幕府がそれら諸藩に賦課した大規模軍役動員に注目しながら、そこに表われる幕府と藩、藩と藩相互の政治的関係を考察することを目的とした。

参加者は、東京大学史料編纂所において、近世前期の史料の研究・編纂に従事していた(担当史料集『大日本史料』第十二編・『大日本近世史料 細川家史料』・『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』)。研究・編纂を進める過程で国内外の多くの史料を調査・蒐集して来たが、対象は膨大であり、十分な蓄積を達成したとは言えないのが現状である。一方、全国各地の研究者や史料所蔵機関の努力と自治体史等の編纂活動により、大量の史料群の整理・公開とそれを利用した研究が進展しているが、いまだに利用困難な状態のまま残されているものも少なくない。自治体史の編纂を例に取って言えば、多くの場合、中世編では史料を網羅的に蒐集・翻刻しているのに対して、近世編ではサンプル的な抽出にとどまっているのが通例である。中世史研究と近世史研究の間には、研究資源である史料の利用環境に今なお大きな懸隔があるとみるべきである。研究参加者に関係の深い近世前期を対象にした歴史研究はこれまでに大きな成果を残して来たものの、今後これをさらに発展させて行くためには、何よりもまずその基礎となる大量の史料を蒐集し、史料学的な分析・研究を進めながら、利用可能な研究資源として広く公開する条件を整備して行かなければならないと考えた。

こうした現状認識のもと本研究では、近世前期、とくに十七世紀前半に年代を限定し、以下に詳述するような独自の手法によって研究を進めることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、西南諸藩史料の蒐集(撮影)・整理を進めた。大名家史料・藩庁伝来史料としては永青文庫(小倉藩・熊本藩)、山内家史料(土佐藩)、毛利家文庫(萩藩)、鍋島文庫(佐賀藩)・中川家史料(岡藩)等、大名重臣家伝来史料としては松井文庫(小倉藩・熊本藩家老)、大村彦右衛門家文書(大村藩家老)、坊所鍋島家文書(佐賀藩家老)等を調査対象とした。

上記のうち大名重臣家史料を重要な調査・研究対象として位置づけたことが、本研究の特色のひとつである。代表的な重臣家史料である松井文庫・多久家文書(佐賀藩家老)・坊所鍋島家文書(同)は、一部が翻刻されており、また益田家文書(萩藩家老)は先行する科学研究費によって研究が進みつつある。だが、全体として目録化や史料の調査・分析等が十分に進んでいるとは言い難い。当該期の幕藩関係史研究を進める上で、藩主や他藩の重臣等と濃密な連絡や情報交換をおこないつつ国許や江戸の政務に直接当たっていた重臣層の史料を分析することは不可欠の課題となっている。

このように蒐集した西南諸藩史料を素材として、それらを統合的・相互比較的に研究することが本研究の特徴である。そのような研究方法を採ることによって、史料学的研究としては、たとえば当該期の典型的な一次史料である書状類を素材にして、藩の意思決定・伝達システムの整備過程と文書様式の変化の関係の問題を、各藩の事例を比較しながら分析することが可能となる。また、当該期の史料には国語辞典にまだ掲載されていない語句が多数散見し、しかもそれらが各地域の史料に共通して表れる場合が少なくない。そうしたいわば希少語句に関する知識・情報は、本研究のような統合的な史料研究を進める中で、より深く、精緻化されていくことが期待される。

本研究では、各藩に数多く残る藩士等の家譜(系譜)史料を重視し、それらに含まれる情報を分析することにも力を注いだ。具体的には、萩藩の「閥閥録」や「譜録」のように、藩士各家に伝来した文書類を藩が提出させて作成した家譜類もあるが、そこに書写・採録された史料、とくに近世前期以前にかかる史料は原本が既に失われていることが多い。本研究では、逸失した原本史料の欠を補うため、それら家譜採録史料を分析対象に加えることにした。萩藩については、一門・重臣層の家譜に採録されている近世前期史料を分析し、目録データベースを作成して公表することを目指した。

そして、本研究では研究を進める上での切り口として、幕府が各藩に賦課した大規模な

軍役動員に注目した。具体的には、戦時の軍役動員の事例として、一六二三年(元和九年)の松平忠直隠居処分事件に関わる諸大名の動員準備、一六三七年(寛永一四年)～一六三八年(寛永一五年)の島原天草一揆と、その後一六四七年(正保四年)までの外国船対応のための長崎周辺沿岸防衛とを、また平時の軍役の事例として一六二〇年(元和六年)～一六二五(寛永二年)に行われた大坂城助役普請を取り上げた。大規模軍役動員に注目するのは、それ自体が当該期の重要な事件・事象であり、その関係史料を横断的に分析することによって幕府と藩、藩と藩相互の関係がより鮮明に見えて来ると考えたからであるが、それと同時に、上記の軍役動員が西南諸藩の多くに共通して賦課されたものであったため、これを手がかりとして多量の史料群の中から同一時期、同一事件に関わる史料を抽出することができるからでもある。

元和九年の松平忠直隠居処分事件では、予断を許さない状況下、個別の大名が、情報の収集を進めつつ、幕府からの動員発令を想定しながら、周到な準備を進めていったであろうことが推測される。その具体的な過程を、上記の大家家史料・重臣家史料の中の一次史料の中から復元しようとした。

島原天草一揆が幕藩制国家成立過程における幕府権力の性格とその段階規定を検討する上で重要な事件であることは言うまでもない。本研究ではこの一揆とその鎮圧のため幕府が行った軍役動員に関わる史料を蒐集し、情報・伝達・記憶という視点からそれらを史料学的に分析する。事件の中で刻一刻と変化する出来事が当事者にどのような情報として伝達され、共有化されていったのか、後世にこの事件がどのようなものとして記憶されていったのか、それぞれの過程を克明に跡付けようとした。

当該期の西南諸藩の軍役動員について考える際、それが国内的要因のみでなく対外的要因と深く関わっている点を見逃すことはできない。島原天草一揆の鎮圧に加え、一六三九年(寛永一六年)のポルトガル船来航禁止に伴う沿岸防備体制の整備と長崎警固、その発動として一六四〇年(同一七年)及び一六四七年(正保四年)のポルトガル船来航時の対応は、いずれも西南諸藩の軍役動員を伴った。本研究ではこれらの事件にも焦点を当て、外国語史料を含む対外関係史料と諸藩史料の双方を利用しながら、国内的要因と対外的要因の相互連関の様相を具体的に明らかにすることを目指した。

関ヶ原の戦いの直後から寛永期まで幕府が諸藩に度々賦課した助役普請は、参勤交代や将軍上洛の供奉等に並ぶ平時の軍役動員のひとつであるが、度重なる普請への動員は各藩にとって過重な負担となっていた。各藩

は助役普請に関わる情報を幕府関係者や他藩から集めることに力を注いでおり、その痕跡が諸藩の史料の中に数多く残されている。助役普請のうち元和～寛永期の大坂城普請は前後三期にわたって行われ、いずれも西南諸藩に集中的に助役が賦課された。これに関する史料はたとえば松井文庫、山内家史料、毛利家文庫など各藩に多数伝存しており、一部は翻刻されて研究に利用されているが、その総数からみるといまだ十分とは言えない。本研究ではこの大坂城助役普請にも注意しながら諸藩史料を分析し、そこに表れる幕藩関係、藩藩関係の特質解明を目指した。

これまで近世前期の幕藩政治史研究は、特定の個別藩(対幕府)の枠組みの中で分散的に進められる傾向が強かった。近年それを克服しようとする努力が始められているが、本研究は大量の西南諸藩史料を並行的に蒐集し、統合的に研究することによって、それをさらに発展させることを目指した。

本研究で目指したものには大きく分けて、①対象史料の蒐集、②史料の整理・加工、③分析・研究総括、の三つの行程がある。このうち①史料の蒐集は、西南諸藩を中心として大名一八家、所蔵機関にして約二〇機関を調査対象とした。②の整理・加工については、撮影して来た史料画像の点検・調整、史料目録・人名情報索引等のデータベース作成等である。③の分析・研究総括は、研究代表者・分担者がそれぞれ主な担当を決めて行ったが、常に相互の連絡・調整を図りながら全体としての成果を取りまとめていくことを目指した。

4. 研究成果

報告書『東京大学史料編纂所研究成果報告2012-6 十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員』に、研究報告6本、史料翻刻1本、付録CD-ROMにおける文書目録(稿)2本(毛利家文庫巨室「付録」所収文書目録・毛利家文庫・継立原書所収初期藩政史料原本史料目録)を収めた。

報告書における小宮木代良報告及び木村直樹報告は、当該期の戦時(もしくは、その準備段階)における全国的規模の軍事動員において、各大家の動員の具体相を明らかにしようとしたものである。本研究の特色である重臣層レベルも含む史料収集の成果にも基づき、可能な限り一次史料を中心とした分析を行った。

次の及川亘報告・佐藤孝之報告は、この時期の平時の全国的な軍事動員として、公儀普請と将軍上洛を対象とした。及川報告における豊富な史料情報から、戦時の動員との共通点、もしくは相違点を探ることも可能である。また、佐藤報告では、秀忠の元和九年上洛の江戸出立日をめぐり、大名側の一次史料から

再検討を行った。

山口和夫報告は、軍役の賦課対象大名の呼び名の設定・改編・把握に機能するものとしての、秀忠及び家光発給の官途状・一字書出の分析を行った。

松井洋子報告は、オランダ国立中央文書館「日本商館文書」中の商館受発信書簡集から、レイニアー・H・ヘスリンク氏の翻刻協力を受けつつ、「島原の乱」に関する情報を含むオランダ語史料の概観を行っている。当該事件におけるオランダ人の関与の実態を解明する上で、今後の研究の基礎となる史料を提供するための報告となっている。

次に、史料翻刻として土佐山内家宝物資料館所蔵「長帳（山内家御手許文書）」の甲五（元和九年）・甲六（寛永元年）を収録した。元和末年の土佐山内家は、元和八年に伊勢桑名城主松平定勝（山内忠義室徳川氏の実父）等の仲介により、幕府の指導下に財政再建に取り組み始めており、厳しい財政状況のもとで、元和九年の徳川秀忠・家光将軍父子の上洛への供奉や、寛永元年に本工事の始まる大坂城再築普請（第二期工事）に対応していた。従って甲五・甲六には、本科研のテーマである軍事動員に関係する文書が多数収録されており、収録される全ての文書を翻刻することとした。なお甲四すなわち元和八年以前については、すでに『大日本史料』第十二編に概ね採録されている。

また本紙の付録として、安藤奈々氏（史料編纂所 RA）作成の「毛利家文庫・巨室『譜録』所収文書目録（稿）」と、山田将之氏（史料編纂所 RA）・吉成香澄氏（同）・及川作成の「毛利家文庫・継立原書所収初期藩政史料原本史料目録（稿）」を収録したCDを附属した。

前者は本科研で取り組んだ大名重臣家史料調査の一環であり、毛利家一門六家（宍戸家・右田毛利家・厚狭毛利家・吉敷毛利家・阿川毛利家・大野毛利家）と永代家老二家（益田家・福原家）の系譜史料『譜録』所収の文書を目録化したものである。『譜録』所収文書には、現在原本の失われているものも見られることから、これらの研究資源化を目指して、現存の原本との対照も行った。

後者は編纂史料や書写史料が中心の毛利家文庫の中にあって、初期藩政史料の原本がまとまって残されているという点で注目される継立原書「慶長元和頃物品受渡受取控」の研究資源化を目指して、収録史料の目録化を行ったものである。毛利家内での贈答品や備品の管理の在り方などが窺え、初期の大名家中での実務的な側面の解明に役立つであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ① 小宮木代良、松平忠直事件前後の諸大名の動員準備、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、11-38
- ② 木村直樹、島原の乱と軍事動員、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、39-53
- ③ 及川亘、萩藩毛利家・寄組「柳沢文書」の天下普請関係史料、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、55-83
- ④ 佐藤孝之、元和九年秀忠上洛の江戸出立日をめぐって、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、85-95
- ⑤ 山口和夫、徳川秀忠・家光発給の官途状・一字書出について、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、97-108
- ⑥ 及川亘、土佐山内家宝物資料館所蔵「長帳（山内家御手許文書）」甲五（元和九年）・甲六（寛永元年）、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、109-228
- ⑦ 松井洋子、レイニアー・H・ヘスリンク「島原の乱」に関するオランダ語史料、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6、査読無、2013、(1)-(58)
- ⑧ 木村直樹、近世初期上方の政治情報と豊永賢斎、東京大学日本史研究室紀要別冊 近世社会史論叢、査読無、2013、329-336

〔学会発表〕（計4件）

- ① 小宮木代良、松平忠直事件前後の諸大名の動員準備、公開研究会「十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員」、2012年12月7日、東京大学史料編纂所
- ② 佐藤孝之、元和九年秀忠上洛の江戸出立日をめぐって、公開研究会「十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員」、2012年12月7日、東京大学史料編纂所
- ③ 及川亘、萩藩毛利家・寄組「柳沢文書」の天下普請関係史料、公開研究会「十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員」、2012年12月7日、東京大学史料編纂所
- ④ 木村直樹、島原の乱と軍事動員、公開研究会「十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員」、2012年12月7日、東京大学史料編纂所

〔図書〕（計2件）

- ① 木村直樹、吉川弘文館、幕藩制国家と東アジア世界、2009年、313
- ② 小宮木代良・佐藤孝之・松井洋子・山口和夫・及川亘・木村直樹・レイニアー・H・ヘスリンク・安藤奈々・山田将之・吉成香澄共著、東京大学史料編纂所研究成果報告 2012-6 十七世紀前半西南諸藩における大規模軍事動員、2013年、286

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 勝美 (MIYAZAKI KATSUMI)

(二〇〇九年度代表)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号 60143533

小宮 木代良 (KOMIYA KIYORA)

(二〇一〇年度から代表)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：90186809

(2) 研究分担者

松井 洋子 (MATSUI YOKO)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：00181686

佐藤 孝之 (SATO TAKAYUKI)

(二〇一〇年度から分担者)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：30170757

小宮 木代良 (KOMIYA KIYORA)

(二〇〇九年度のみ分担者)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：90186809

山口 和夫 (YAMAGUCHI KAZUO)

東京大学史料編纂所・准教授

研究者番号：00239881

及川 亘 (OIKAWA WATARU)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：70282530

木村 直樹 (KIMURA NAOKI)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：40323662

(3) 研究協力者

安藤 奈々 (ANDOU NANA)

東京大学・史料編纂所・R A

吉成 香澄 (YOSINARI KASUMI)

東京大学・史料編纂所・R A

山田 将之 (YAMADA MASAYUKI)

東京大学・史料編纂所・R A